

高専学校家庭科の教育構造

(1)教科指導の実態と学習モラル

島根大教育 多々納 道子

目的 女子の高専学校進学率が上昇していきにかかわらず、家庭に関する学科(以下家庭科と称する)への入学者の割合は、年々減少傾向にある。このような状況は、家庭科の在り方を根拠から問い直すものといえよう。そこで、現在の家庭科は、その中で学ぶ生徒に対して、どのような教育や将来の見通しを与えようとしているのかという家庭科の教育構造を把握するとは、改善のための基礎資料となるものと思われる。そこで取り上げる教育構造は、生徒が中学校から特定の高校へ選抜配分されて高校生活を送り、そこで教育や生活を通しての予期的社会化という一連の過程を含むものである。本報告では、まず高校教育の中心である教科指導の実態に焦点をあて、学習モラルの高位の差異による生徒の学習への取り組み方を明らかにすることを試みた。

方法 家庭科の単独校であるA県B高校の2年生243名を対象にして、昭和55年1月30日～2月15日にアンケート調査を行った。

結果 学習モラルの高い群(H群)と低い群(L群)に分け、それぞれの教科指導の実態との関連をみた。①授業は困難を感じ、脱落しているものの割合は、L群の方が多く学習モラルとの関わりが大きい。②生徒が学習している科目の中で難しいと指摘するものは、数学、英語、理科など用具教科や内容教科に分類が主のもので、家庭への指摘は少ない。しかし、H群とL群を比較すると、H群は家庭をより重要で、楽しくしかも難しくないと肯定的にとらえている。③以上のことより、L群は知識や道德面の指導が十分になされにくいといえ、授業の満足度もやや低くなる。